

インタビュー（3）

楠田実氏（佐藤首相首席秘書官）

聞き手 田中明彦（東京大学東洋文化研究所助教授）

村田晃嗣（広島大学総合科学部専任講師）

場所 楠田事務所（東京・平河町）

日時 1995年11月16日

楠田 まず具体的にどういうことをお話すればいいのか、質問という形でしていただければ。

村田 まず最初に、佐藤政権との関わりというところからお話いただけると、ありがたいんですが。

楠田 ああそうですか。今もちょっとそれを別な形で頼まれて書いとるんですが。私は元々産経新聞の記者でございまして、政治部に来たのは昭和29年、ちょうど吉田内閣の末期でございまして。それで当時の産経新聞は東京に進出したばかりで、私どもの一期前ぐらいの連中が主体になって、各社並のいろんな体制の編成が始まって、まもなく私どもが中心になって政治部強化というのがありましてね。最初に私は三木・河野派というのを担当したわけです。もうすでに保守合同の機運が少し出ていた時代で。大磯に吉田さんが帰る度に、ただ闇雲に車で追っかけてですね、その近くの旅館に泊まって、吉田邸の張り込みをしていたんですけどね。まもなく吉田内閣が退陣をするというようなことで、私は三木武吉さんという人の張り番を傍らやらされて、三木さんのご自宅が当時、東京の千駄ヶ谷にありまして、三木邸の前で車を止めてですね、出入りを、誰が来て来ないかというところから始まるわけです。先輩の大物記者たちは木戸御免でさっさっさと入っていくと。私なんかほんとの駆け出しですから、そんなことは許されない。先輩たちの仕事ぶりとか、入ってくるのを横目で見ながら、どういう政治家が来たかを報告するということだったんですけど。そのうち、三木さんが全国遊説を始めたんです、保守合同の理念を説いてですね。それで、東北、北海道、中国、九州。四国には行きませんでしたけども、三木さんの全国遊説にずっと同行して。まあ、新聞社の方も、早く記者を育てなきゃいけないということもあって、ほとんど全行程に私は同行することができた。三木さんの演説会では、だいたい小学校の校庭とか、あるいは公民館なんかでおこなわれるわけです。それを聞きながら、そしてまあ、夜になれば同じ旅館に泊まりますから、そこで一緒に食事をしたり。いわゆるその三木武吉という人の警咳に接する機会が多くなって。まあ若い新聞記者ですから、大政治家の一語一語が大変大事に。まああの人は自分自身がほとんど権力欲のない人

で、鳩山さんを総理にするために心血を注いだけども、自分自身はなにかになろうという事はまったくない、影の実力者だったわけですが。それで間もなく三木さんが昭和何年だかに亡くなりますね。三木・河野派とってたのが河野派になってしまったわけです。毎晩、河野さんとこへ夜討ち朝駆け、いわゆる新聞記者の基本をやってたんですけど。どういうわけか、なかなか河野さんとはうちとけることができない。というよりも、私自身の能力の問題もあったんでしょうが、腹中に入れてもらえなかったんです。だから仕事がおもしろくなくなってきたんですね。三木さんの頃は私自身が三木さんに惚れ込んで、教科書みたいに三木さんの言葉や演説をね。河野さんの時代になって、それは日ソ交渉のあとですが、河野派を担当してたんですが、どうもうまくいかない。人間てのはやっぱり相性があるんですね。政治家と新聞記者の間でも気脈が合うとかいうのがありまして、河野さんとはどうも合わない、彼の権力的な物言いとかね。力のある政治家であることはわかるけども、まあ産経新聞なんて弱小新聞ですから、そういう先方の考えもあったかもしれませんけど。派閥担当をかえてくれと、私は上司に申し出ましてね。それじゃ、おまえ佐藤派もてといわれまして、その時は岸内閣になってまして、佐藤さんが大蔵大臣ですね。佐藤さんの家はあわしまで、私は池尻というところの都営アパートにいたんですね。佐藤さんの家まで車で5分、福田赴夫さんとこへ7分、保利茂さんのうちはすぐ近くで3分とかね、地の利を占めたところでね。風呂もない低賃金住宅なので月収が2万円かなんか越えると住めなくなるんで、のちに普通の都営に移るんですけど、佐藤さんとの出会いの頃はそこに。だからほとんど毎朝毎晩夜討ち朝駆けしてるうちにですね、佐藤さんて人は非常に寡黙な人ですけども、私もあんまりちゃかちゃかものいう方ではないんで、なんとなく肌が合うというのか。特別に可愛がってくれるようになりましてね。佐藤さんがいってる言葉がですね、わかるようになったんです。あの人はダイレクトにものをいう人じゃなくて、一種の佐藤語みたいなものがあるんですね。極端な例ですけど、池田内閣の最後の会合の時に、佐藤さんが入閣するかもしれないというのが一番大きな問題。朝、佐藤さんは大磯の吉田さんとこ行って相談して帰ってきて、ため池に事務所があって、そこに佐藤派の人たちが集まって。私はもう入閣するだろうと。周辺の人をいろいろ取材してみるとそうだし。その晩、佐藤邸での記者会見ですね、佐藤さんは俺は入閣したくないんだと、こういったっていうんです。私はもうその時はその会見にはでなくて、佐藤入閣の記事を書きました。佐藤邸いったらみんな玄関のところにいる、どうしたんだっていったら、いやしたくないんだと。そりゃするってことじゃないかって、僕がいったね。間違うと大変だぞって、各社に注意して。その時、私の話を聞かずに先に帰って、佐藤入閣せずという記事を書いた社もあるんです。俺はしたくないんだとうのと、俺はしないんだというのは、

ちがうですね。そういうのが段々付き合ってるうちに以心伝心でところがあって。その前にですね、これは私の本にも書いてございませうけども、池田さんの再選の時に、佐藤派内は当然、主戦論ですね。というのは、岸さんが辞めた時に、佐藤さん自身が名乗りあげてもいいんだけども、しかしやはり兄弟が続いてやるというのは日本的な常識じゃあない。だから、佐藤さんはいち早く池田擁立に回ったわけなんです。だから、佐藤派が主導権もって、もちろんあとから岸派が参加し、他方、大野伴陸さんが立候補し。岸さんが熱海で次は大野君に譲るといふ念書を書いたという伝説的な話があるんですか、それに基づいたのかどうか、片や池田、片や大野、石井さんも出たんですね、石井光二郎。その時に佐藤派はいち早く池田擁立に回る。だから、池田さんの二期目の時には当然佐藤は挑戦すべきであるというのが、佐藤派の大勢だったんです。そしたらですね、国会の中を、私、田中角さんに捕まっって、角さんは政調会長だったんです。それで、おい楠田君、部屋きてくれて、彼の部屋いったら、俺は今度親父は立候補すべきじゃないと思うと、もう一期池田にやらさなければ池田だって納得しないだろうと。血みどろの争いをしてまでね、池田は元氣だし、折角まああ例の60年安保のあれを低姿勢、寛容と忍耐で切り抜けて、それで所得増政策みたいなものをあげてですね、人気もあるしね。今ここで挑戦するのは俺はいい作戦でないと思う。だが俺の意見は少数派だと。角さんはすでに政調会長、38歳で郵政大臣やって実力者ではありましたが、のちほどのように絶対的な権力者であったわけではなしに、まあ佐藤派の幹部としてはワン・オブ・ゼムであつたわけですね。他の人たちはみな主戦論。だから俺は今度は立たない方がいいと思う。君は親父の信用があるから、君の口から親父にそういつてくれと、そう頼まれたんですね。私は、じゃあ、わかりましたと。まあしかし、時と場所というか、タイミングがありますから、明日佐藤さんが大體にいくと、そういう話を聞いた。私が朝待ってたらね、おい、一緒に乗ってくかていうから、はい、お願ひしますっていいですね。秘書が前に助手席にいて。片道2時間、4時間一緒に話をしながら。佐藤さん夫妻が昼飯を吉田さんに御馳走になつてる間、私は運転手と外いって、大體においしい鰻屋がありましてね、そこで待ってる。その帰り道にね、実は角さんはこういう意見だけでも、もう一回見直した方がいいんじゃないかということですが先生どうお考えですかと聞いたら、俺もそう思ってるて、立候補しないと、今度はそれはまだ早い段階、2月ぐらゐの段階ですから。これはいつか記事にしてもいいですかといったら、してもいいと。しかし、まあ慎重にやってくれよということ。それからしばらくして、佐藤さんが奈良の県連大会みたいなものと呼ばれていくと。私は社にいつて出張させてくれと、それで同行したんです。ところが他の社は誰も来てないんですね。こりゃいいなと思つてね、当時は今の新幹線とちがつて一等のココンパートメントがあつてね、

個室が。それで、この間の話を車中談という形で書いてよろしいですかと、するといいよと。二人でそういう話をして、こうこういう形で書くつもりですと説明をして、了解をとった。そしたら、木村武夫という人がいましてね、当時落選中でしたけども、佐藤通産大臣時代に秘書官をしたんですね。その元帥が、まあ我々はあとで元帥、元帥といった、その元帥がなんの話だていうから、実はその佐藤先生は今回の総裁公選には出馬しないというご意向ですから、それを私が車中談で書く了解を今とったんですと。そんな馬鹿なことがあるかって怒りだしてね、木村さんが。まだ戦争も始まってない前にそんな早々とね狼煙を上げる必要はないじゃないかと、敵前逃亡じゃないかと。そりゃあ、そういうことなら、一応同志の了解を得てからしてもらいたいと。そりゃまあ当然のあれですね。あの人は直言居士だから、佐藤さんにもそういう。そしたら、いいんだ、楠田君はその記事を書くために今日来たんだからって、佐藤さんはそっぽを向いちゃって。その日ね、名古屋で、朝日新聞名古屋支局長てのが昔佐藤派担当してた人で、その人が途中で乗ってきたんですね。僕は車中談で書くつもりだったけども、朝日の人が来てるから、ちょうど名古屋で共同記者会見で形になった。といっても、支局の人ばかりなんですけどね。まあ淡々と自分は今度立候補しないつもりだてなことをいったんですけど、支局の人は必ずしも中央の政局に通じてる人がいるとはかぎらないわけで、各社とも非常に簡単な記事になったわけです。私はもう大々的にね、紙面半分うめつくすくらいのねトップ記事にして、横に解説をつけて。それはもう、池田さんがもう2年やるってのは、政治的にはたいへん大きな問題でしょう。そういうこともあったりして、特ダネをいわゆる佐藤語を解するが故に、同じ会見でもね、言葉の意味、裏付けを保利さんとか角さんとか、当時の幹部連中に裏付けをとればね、彼がいった背景が浮かんでくるわけですね。ですから、まあ借りを感じてたわけです。本当はまあ池田さんも人気沸騰とまではいかない最初の2年目ですから、その時にやっていたらね、本当はそのあるいは面白い戦いになったのかもしれないんですね。事前にそれを潰した形になったもんですから。それで池田さんはすんなり再選をして、それから色々その間に政治情勢が続いて。昭和38年の12月25日クリスマスの夜ですね、これも本に書いております、佐藤邸にいったらね、他の社の人には来てない。いつもはまあ、応接間で何人かで懇談をする。こっちに来てくれとって、食堂に招じ入れられてね、佐藤さんテレビをつけて一人でトランプ占いをしてる。あの人はトランプの一人占いでのは趣味だった。何枚か並べていってエース、キングと続けていくゲームがあるでしょう。あれはうまくいくと全部つながっちゃう、だめだと残っちゃう。そのゲームがとても好きでね、しょっちゅうやってたですよ。その日もそれをやってた。お一人ですかと聞いたら、いや家内が麻生和子さんのパーティーに呼ばれた、俺はまあたまには一人でのんびり

しようと思って、いかなかったと。君は酒の会にはいかないのかっていうから、当時はクリスマスてのはですね、銀座や新宿でてカンカン帽子をかぶってクラッカーを抜いて騒ぐてのがアメリカ的な、まあそれがアメリカ文明の神髓かどうかはしりませんが、クリスマスてのはそういうことをする時代で、その頃は外で騒ぐという時代の絶頂期だった。だから、新聞記者にかぎらずサラリーマンはね、それぞれのいきつけのバーや飲み屋でねパーティーをやる。私はたまに家に早く帰ろうかと思って車乗ったんだけど、ついこっちに来てしまいましたてな話をして。その時にですね、私は前から考えてたんですが、日本の総裁選挙てのは即総理大臣選挙なんですよ、当時はね。自民党総裁になれば即総理大臣。少なくともまあ、鳩山内閣、石橋内閣、池田内閣までは党内選挙なんですね。要するに、政権の政策を発表してそれを世に問うというようなことをしてなかった。僕はね、そのケネディの例に倣うわけじゃないけども、これからはやはり日本の政治も、総裁立候補者は自分の政策綱領を国民に問うてね、党内に問うと同時に国民に問うてね、やっぱり自分がこういう政治をしますというのをやるべきじゃないかと。いや実は俺もそう思ってるんだ、という話なんですね。じゃ、なんか準備をしてるんですかといったら、準備はしてないと。だって毎日佐藤派の会合では勉強会やってるじゃないですかといったら、政治家の会てのはどっちかといったら戦略・戦術、多数派工作の党内問題が主でね、政策をね、どういう政策を打ち出していかって話にはなかなかならないんだと。僕はかねてから考えていたことなんですけども、もしそうであれば私がたたき台をチームを作って準備してみましようかといったら、そうしてくれるかという話でね。それでまあ、同志を募ってですね、こういう話てのはあまり表面化したらうまいかないって僕は直観的に思ったから、幅広くいろんな人に呼びかけるのはよくないだろうと。私の手元に産経新聞に優秀な奴がいますから、政治部に。一人は笹川たけおてのがいましてね。彼は28年の東大文学部かな。それからフルブライトにいて29年に産経に入って、35-36年までアイゼンハワー・フェローシップでまた留学してるんですよ。彼はそれで帰ってきたばかりで、いろんなアメリカの政治形態について僕にレクチャーして、日本もこうでなくちゃならんと僕に吹き込んだのがそもそも原因でね。それからもう一人千田君て、のちに東海大学の教授になりましたけど、やはり政治部の記者で。それで産経だけでもあれだからっていうんで、共同通信にみつもと君てのがいまして、これはのちに田中角さんの秘書になりましたけども、あんまりうまくいなくて途中で辞めてペンキ屋始めた、そういう非常に変わった人材で。まあその3人と私でチームを作ってね。まあその最高5人だと私は思った。佐藤さんに一応こういうチームをつくったと、しかし新聞記者だけの議論では書生論では始まるだろうけど、最初はね。いずれは具体的な政策の中身を出してかなくちゃならな

い。政策のわかる政治家を出してくれといったら、愛知揆一君と彼が指名して、それで愛知さんに相談して、それで佐藤さんの方で仕事場を用意してくれましてね、それが今はもうありませんけどグランド・ホテルってのがありまして、官邸の下のほうにあるんですよ。その414号室てのを仕事場にとってくれて。で昭和39年1月15日の成人の日です。作業を始めたわけです。非常に広範・多岐にわたりますけど、メンバーは増やさない。必要なことはね、我々は新聞記者ですから、お役人とか学者先生とか、あるいは財界のしかるべき人とか、取材をするという形で問題点を集めて、それをみんなで集中討議するというやり方が一番いい。それにまあ財政専門家の愛知さんがいるわけですから。それをしこしこしこしこと、記者の仕事の合間にやるわけで、毎日やるわけにいかないけど、1週間に一回は必ず会って、持ち寄って議論をして、というようなことを繰り返して。5月の連休にですね、友人が世話してくれて、日立製作所の小石川寮というのがある。そこでまあ、一緒に合宿みたいにして、みんな休暇をとってねその時は、4日ばかり集中的に今までの議論を持ち寄って、整理をしたわけです。それをそこで整理をして、当時はワープロがあるわけじゃないんで、みんな手書きでやったんですが、複写機でやって。佐藤オペレーションで名前に1月15日にしたんですけど、略称Sオペ、キャップは愛知さんと。しかし、このSオペは覆面部隊に徹すると。一切その存在を秘匿すると。佐藤さんに対する連絡は文書でおこなうと。必要に応じて愛知さんが口頭でご説明をすると。6月27日に発表したんですけども、「明日への戦い」という形でね、全部新聞社に配ったんです。これは私作ってますけど、「佐藤栄作演説集」の中に最初に入れたわけです。世界観てか、冷戦の時代は終わったとかそのあたりから始めて、政治・経済・外交の考え方をですね。その過程で笹川というのがですね、今まで日米首脳会談というのは何度かおこなわれているけれども、沖縄問題の話は出たけども、日本政府が正式にアメリカ政府に対して沖縄返還要求したことはないじゃないかと。佐藤さんがもし総理大臣になったら、沖縄返還を米政府に対して正式に要求すると、いうべきじゃないかと。これは言い出しっぱはその笹川君なんですね。そういわれてみると、沖縄の話は出てるけども、返還してくれということは一回も言ってない。実はこれは書かなかったんです。何故かという佐藤さんがね、具体的な外交問題を政争の具にしたくないと、これには書かないでくれということで、これには書かなかった。ただし、立候補の記者会見の時に、自分が政権を担当したら、米政府に対して沖縄返還を正式に要求するというのは、記者会見でしゃべったわけですね。これがまあ、いうならば、長い沖縄返還問題の最初の第一歩ですね。それでまあ、総裁公選で4票差で負けちゃったんですね。Sオペを解散、愛知さんはその時池田内閣の文部大臣に就任しちゃったんです。でSオペを解散しようと思ったら、佐藤さんが解散しないで

くれと、捲土重来を期したいと。そのためにも、これは存続してくれと。じゃあ、キャップは誰にするのかといったら、西村栄一だというんですね。西村栄一て人は運輸省で佐藤さんと同期ですけども、まあ我々は汚れの爺さんといってたんです、ここのところにちょっとアザがあってね。この人は技術屋さん出身なんです、同じ運輸省でも。佐藤さんとは本当の親友で。こういうね、近代的な学問のテーマになるようなことを、外交とかなんとかを論ずるような人ではないけども、ただ佐藤さんとしては、変な、変なてのはおかしいけども、人を推すよりも、西村君のほうがいいという気持ちだったと思うんですね。そのうちに池田さんが癌になって、川島・三木武夫両氏が調整役になって、がたがたしたけど、最終的には佐藤さんが指名される形で池田さんの後継者になった。それでまあ、私の仕事は、匿名の仕事は終わったわけですけどもね、本来の新聞記者としての仕事に専念できるなあとも思ってたんですけども。内閣がスタートしてみると、最初の秘書官は大内さんというずっと通産の、選挙からなにからまですべてを仕切ってた人がなられたわけで、まあ当然なわけですね。それで、40年の暮れに解散があって、選挙それでも勝ったんですね。その頃からどうもマスコミとの関係がよくないということになって、なかなか記者クラブってのはうるさいですからね。当然、スポークスマンは官房長官がいるわけけども、官房長官も最初は福永さんという吉田さんの直系の人だったんですけど、病気になられて。それで官房副長官の木村さんが昇格をするというようなことがあったんです。いずれにしてもしかし、政治家と役人だけではどうにもならないという、やっぱりマスコミ出身の奴が中に入らないと、いろんな面で具合が悪いという。それと一つは、私は外にいたんですけども、演説は最初の演説からずっと私が書いてたんです。佐藤さんの第一回の出馬表明から就任受諾演説、それから第一回の所信表明とかね。だから、官邸に新聞記者として出入りするの自由な立場ですけども、協議の場に出るようなことはなかったんですね。沖縄に行く時に、当時は橋本官房長官で、橋本さんから電話がかかってきて、スピーチをみてくれといわれましてね。ホテル・オータニだったと思いますけど、そこで朝いって午前中かかってそのスピーチの検討をしたんですけど。祖国復帰がないかぎり日本の戦後は終わらないという文句はですね、途中の紙にあったんですよ。空港に到着した時にはもってなくてね、自民党支持者の、沖縄県民の自民党支持者の会で、その中でその文句が出てきたんです。これを一番先にもってきなさいと。あとはもう字句の問題。これが一発あれば。それを私は橋本さんに進言してその通りになった。あとは字句の修正やなんか少ししてあげて、というようなことは途中でありましたけどもね。そういうSオペの因縁から、マスコミからの秘書官起用という問題に話が段々発展して行って、前の池田さんの秘書官の伊藤さんて方は西日本新聞の方なんですね。朝毎読からだすというのはね、なかなかうまくな

いわけね、お互いに牽制しあって。私にという話になって、形としてはですね、佐藤寛子夫人から宮沢喜一さんに頼んでね、宮沢さんが産経新聞の水野しげおさんに頼むという形をとった。というのは、宮沢さんというのは水野さんと仲がよくって、水野さんがアルゼンチン大使になりたいって獵官をしたことがあるんですね。あの女性なんていいましたかね、オペラになった有名な女性がいるでしょう、アルゼンチンの。政治家の、大統領の奥さんで。ちょっと度忘れした。その人の国へ俺を大使に出せとって、半分は冗談だったでしょうけど、宮沢さんなんかと毎晩飲んでたという時代がありましたね。それで水野さんに呼ばれて、どうせ政権なんてのは1年か2年で終わっちゃうんだからいいと。その間、休職していってくれと。そりゃあ参りますが、いく以上は社を辞めさせて欲しい。やっぱり、総理の秘書官てのはまったく無職でなければならないし、片方に席があるというようなことではね、他の社の人に信用してもらえない。建売住宅買ったばかりだったんで、借金がありましてね、退職金が欲しいんだと。退職金200万円もらって、それで佐藤の秘書官になったというのが、事の次第でございます。

田中 あの少しですね、楠田さんの『首席秘書官』読んで、すべてについていろいろお聞きしたいことがあるんですけども、今日はですね、私はですね、関心でどちらかというと安全保障の問題と、それから日中関係の問題、この二つについて少し。一番最初にですね、今Sオペの段階で、私もこの本（『日中関係』）の中で書いたんですけども、佐藤さんの初期の中国への見方というのは、そのあと中国が彼を激烈に非難したほど消極的ではなくて、かなり中国との間の関係を改善しようと思っていたようにみられる、と私書いたんですけど、Sオペのところでは先程沖縄の件がございましたけど、中国についてはどんなようなことをお考えになってましたか。

楠田 沖縄の問題が出てくる前は中国をどうするかというんで、外交的には一番議論した問題。それで、関係改善をしなきゃいけないという前提なんですね。それで議論して、というのは佐藤さんは通産大臣時代の関心なんかがあって、非常に前向きだったわけですね。ところが、総理になったら周囲の事情もあって、一政治家の時代とはちがって、そんな大きなことはいえない。しかし、いずれ佐藤政権が来たら中国問題に当面せざるをえない。だからどうするかということは随分議論して、当面は政経分離でいくけれども、いずれ関係をつけなきゃいけないだろうと。池田内閣ではおそらく無理ではないかと。佐藤内閣の時代になるだろうと。だからどういう手をうつか随分議論しました。それで内心は非常に前向きなんですけれども、なにしろ日華平和条約というものがあり、吉田書簡て問題があり、どんどん話が硬直化していくんですね、佐藤時代に。結論的には中共が核武装しないで平和共存の路線をとることを期待し、当面、経済、文化、人間の交流などあらゆる可能



な分野で日中間の交流を深める、という程度に簡略化したんですけど。この問題は佐藤さん非常に熱心でね。

田中 ただその頃のご認識でですね、中国との関係を進めることが、アメリカとの関係にどんな影響を与えるかということについては、どんなご認識だったんですか。

楠田 当時の日本の外交官の悪夢というのがありましてね、ある日朝目が覚めてみたらアメリカと中国が手を握っていたと。のちに実現するわけですけどね。だいたい、その日米関係を基にする以上は、アメリカが動く前には動けないというのが、客観条件。

田中 今いった悪夢の時まで時代をいきなり動かしてしまって恐縮なんですけども、ニクソン・ショックの前ですね、どのぐらいこの悪夢は現実味があるというふうに思われていたか。私が調べたかぎりでは、どっかで愛知揆一さんは外務大臣で、アメリカが中国と手を結ぶというようなことはいわれるけども、そういうことは我々にはありえないと思ってる、おっしゃってるんですけどね、佐藤さんの周辺ではですね、ニクソン・ショックの前にどんな感触をおもちだったですか。

楠田 ニクソン・ショックの前ですか。

田中 前です、ですから、ニクソン・ショックは1971年の7月15日ですけども、素の前の4月頃にピンポン外交とかというのが始まってますよね。その前のあたりの、中国がアメリカの卓球選手となんかやるというようなことが起こってるところで、どんな。

楠田 現実問題として受け止めざるをえない客観情勢ですよ。だんだん国内世論が変わってくるというか、国際関係懇談会というのを私が作ったんですね。それはまだ若かった高坂さんと中島嶺雄さんが一応幹事役でね、中国学者の方々に集まってもらって、石川忠夫さん、衛藤藩吉さん、その他ですね。ところが、なかなかこういう懇談会というのは忙しい人ばかりだし、さあすぐ集まってくれといったって、なかなか。それでスタートが遅れてしまいましたね。そこから、その議論を基にして中国政策をどうするかってのを正式に日本外交・政治の中で一つのセオリーを作ろうという考えだったんですけど。

田中 国際関係懇談会ってんですか、あれは最初の会合は遅れてニクソン・ショックのあとになっちゃったですよ。

楠田 ええ、竹下官房長官の時に。木村官房長官の時に作ったんですけど。だから、まあ一つの問題点はアメリカが沖縄返還の決意をした時、それは随分前でしょう、69年の首脳会談で決まったわけですから。その先をね、日本としては読む必要があって、我々の方はもう沖縄帰ってくるんでどっと一安心して、考察力がなかったと思うんですね、外務省を含めて。個人的にはそれを予期していたという人がいたといっても、実際には公式の場ではそういう議論はなされたことはなくて、問題は沖縄返還の意志決定をアメリカが

した時に、じゃあアメリカの中の国際政治・アジア外交てのはどうなんだろうかとということを読み込んだ検討がなされなかった。

田中 あの、そのあとですね、ニクソン・ショックのあとにですね、その国際関係懇談会のメンバーの方と関係するんですけど、佐藤さんの時代にいわゆる”アヒルの水掻き”の中でですね、保利書簡ていうのについて、これは岸本さんの本の中はかなり詳しくお書きになってるんですけども、これについて中島嶺夫先生はあれは私が書いたんだとおっしゃてるんですけど、あれは本当ですか。

楠田 まあ私が書いたという見出しはどぎつすぎるんですけど、保利さんが私に下書きを書けという話があって、私は中国のことはほとんどわからないから、中島嶺夫先生にですね、私が書いたですね原文を一応添削してもらった、という事実があるんですね。しかし、それがまた中島先生が添削して下さったものがそのまま保利書簡になったわけじゃなくて、それがまた保利さんや福田さんなんかの手で書き改められて、美濃部さんのルートで向こうに渡ることになるわけですけどね。

田中 保利書簡てのは岸本さんの本の中にこれが保利書簡であるというのが載ってますけど、あれが最終的なものだと思ってよろしんですか。

楠田 その本は僕もってるんですけども、今ここにはないからなんともいえない。書簡そのものの写しは私はもっているんですよ。ところがね、私は整理が悪い人間で、今どこに入ってるかわからないんですが。

田中 いずれ歴史研究をするとするとですね、どこかの段階で岸本さんの活字になってるものが、これが正本であるということを確認しなければいけないとは思ってるんですけども。

楠田 まああの、考える限りでは正確だと思いますね。彼は、まあ私が推薦したからというわけじゃないけども、結局、保利さんの最後の頃の秘書をしましたから、衆院議長の秘書になったんですね、最後はね。

田中 そうすると疑う理由はないわけですか。

楠田 はい。私のもっているものと同じものを彼がもっているんだろうと思いますね。

田中 その原文はどこにあるか探しになると大変なことですか。

楠田 僕は若い頃からものぐさで、梅先生の、なんでしたか、『知的生産の技術』、あれ読んだってちっとも身につかないんですよ。

田中 その件と似た、また”アヒルの水掻き”ですけども、衛藤藩吉先生の本の中にですね、えぐちまきこってという人の話が出てくるんですが、えぐちさんて方はどういう方ですか。

楠田 私はあの会ったことはないんです。私が記憶してるかぎりではね、確かこがねよし  
てるといふ代議士がおられて、その方が連れてこられたと思うんですね、もう亡くなりま  
したけども。それで、産経新聞で取材をしてその人にあってますよね、ご覧になったかど  
うか。

田中 あの産経新聞がえぐちさんに会ってるんですか。

楠田 ええ、「戦後史開封」で欄で。

田中 今出ている、本になってますですよ。

楠田 そうですね、もう何冊かなったと思いますけどね。それは確か今年の春ぐらいかな。

田中 そうですか、私は去年一年イギリスにいてちゃんと見てなかったんですけど。

楠田 私は沖縄問題で話をして、江口さんのやつそのあとですね。産経でお調べになれば、  
ご本人にあっているようですよ。ただその、どうして私が知らないかという、沖縄返還  
問題が中心で、日中には私はそういう人たちのあれはですね、今、経済協力基金総裁をし  
てる西脇あきらさんというのがいますが、彼はもう一切しゃべらないといってますけども、  
彼が窓口になってるんです。

田中 沖縄との関連でいうとですね、一つよくわからないといひましようか、国連での中  
国代表権のところ、佐藤総理が最後のところで、9月ですか、今までの方針を変えない  
という決断をなさいますよね。このあたりの佐藤さんの心境ていうか、棄権したらいいじ  
ゃないかという意見も多分かなりあったんじゃないかと思うんですけど、なぜ佐藤総理は  
今までの方針変えないってお決めになったんでしょう。

楠田 まあそれはあの、情緒的にいえばね、以怨報徳という戦後の問題、蒋介石野発言が  
あって、日華条約が結ばれて、アルバニア決議案てのが出てきて、段々形勢が不利になっ  
ていって、その時は既に米中会談が行われたあとですよ。だから明らかに客観的な票読み  
からいっても勝てない。これは本当は外務大臣の所管事項ですから、福田外務大臣が日米  
貿易経済会議てのがあった時にですね、ロジャーズ長官と話をして、この問題について  
合意をして、共同歩調をとるといふことを合意をして、帰る手筈になってたんです。しか  
し、その客観情勢からみて、複合二重方式ですか、これが勝てるという見込みはどんなに  
一生懸命がんばってみても、中立国がまだ態度表明しない国が15、6あって、それが全  
部きてもね、まあとんとんという情勢だったわけですね。だから、保利さんが当時幹事長  
でしたけども、保利・福田というのは非常に昔から仲がよくて、保利・福田とこっちがわ  
に田中と、同じ佐藤陣営でも分かれていてですね。保利さんが、これはおそらく佐藤さん  
の意向をうけてですけども、私にね電話しろと、それでロジャーズとの話に結論をつけず  
に帰ってこいと、そういうふうにお前から連絡しろと。それはよくわかるんですね、私

楠田 私はあの会ったことはないんです。私が記憶してるかぎりではね、確かこがねよし  
てるという代議士がおられて、その方が連れてこられたと思うんですね、もう亡くなりま  
したけども。それで、産経新聞で取材をしてその人にあってますよね、ご覧になったかど  
うか。

田中 あの産経新聞がえぐちさんに会ってるんですか。

楠田 ええ、「戦後史開封」で欄で。

田中 今出ている、本になってますですね。

楠田 そうですね、もう何冊かあったと思いますけどね。それは確か今年の春ぐらいかな。

田中 そうですか、私は去年一年イギリスにいてちゃんと見てなかったんですけど。

楠田 私は沖縄問題で話をして、江口さんのやつそのあとですね。産経でお調べになれば、  
ご本人にあっているようですよ。ただその、どうして私が知らないかという、沖縄返還  
問題が中心で、日中には私はそういう人たちのあれはですね、今、経済協力基金総裁をし  
てる西脇あきらさんというのがいますが、彼はもう一切しゃべらないといってますけども、  
彼が窓口になってるんです。

田中 沖縄との関連でいうとですね、一つよくわからないといいたいまいしょうか、国連での中  
国代表権のところ、佐藤総理が最後のところで、9月ですか、今までの方針を変えない  
という決断をなさいますよね。このあたりの佐藤さんの心境ていうか、棄権したらいいじ  
ゃないかという意見も多分かなりあったんじゃないかと思うんですけど、なぜ佐藤総理は  
今までの方針変えないってお決めになったんでしょう。

楠田 まあそれはあの、情緒的にいえばね、以怨報徳という戦後の問題、蒋介石野発言が  
あって、日華条約が結ばれて、アルバニア決議案てのが出てきて、段々形勢が不利になっ  
ていって、その時は既に米中会談が行われたあとですよ。だから明らかに客観的な票読み  
からいっても勝てない。これは本当は外務大臣の所管事項ですから、福田外務大臣が日米  
貿易経済会議ってのがあった時にですね、ロジャーズ長官と話をして、この問題について  
合意をして、共同歩調をとるといって合意をして、帰る手筈になってたんです。しか  
し、その客観情勢からみて、複合二重方式ですか、これが勝てるという見込みはどんなに  
一生懸命がんばってみても、中立国がまだ態度表明しない国が15、6あって、それが全  
部きてもね、まあとんとんという情勢だったわけですね。だから、保利さんが当時幹事長  
でしたけども、保利・福田というのは非常に昔から仲がよくて、保利・福田とこっちがわ  
に田中と、同じ佐藤陣営でも分かれていてですね。保利さんが、これはおそらく佐藤さん  
の意向をうけてですけども、私にお電話しろと、それでロジャーズとの話に結論をつけず  
に帰ってこいと、そういうふうにお前から連絡しろと。それはよくわかるんですね、私

が電話するってことは、まあ私が個人的にそんなこと電話するわけじゃないけど、幹事長が電話すれば、形としては党からの、党の総意をうけてものをいうということに形式的にもなりますわな。それを私が電話すれば、またちがう形になる。私は秘書官だし、福田さんとは非常に懇意だし、だから非常にメディアムな形で東京の空気を伝えることができるというんで、保利さんが私に電話しろと。だから、私は福田さんに電話して、この問題は決着せずに帰ってきてくださいよと。でそうなったわけです。というのは、福田さんに対して佐藤さんは後継者にしようと思っていたから、これで福田に傷がついてはいけないという、どうせ俺はもうすぐ辞めるんだから俺がかぶって辞めれば、福田に傷がつかないだろうという、佐藤さんの配慮があったと思うんですね。

田中 あ、沖縄返還協定の調印での議会での通過てなことを考慮されてたということも考えられますか。それよりも今おっしゃったような福田さんへの、後継者に迷惑をかけたくないとか。

楠田 タイミングとしてはいつ頃ですかね。

田中 ニクソン・ショックが7月ですから、国連での投票が9月の、ああ佐藤総理が決定したのが9月21日なんですよ。それで沖縄返還協定の承認はもうちょっとあとだと思っ

楠田 それはだって、批准したのは翌年5月ですから。まだだから、沖縄返還国会が始まる前ですね。そのあと年が明けて、その頃はまだその問題の後遺症で日米関係がぎくしゃくしていた時代なんですね。それを解消するために田中さんを通産大臣に起用して繊維食器の買い占めをやって、要するに繊維ってのは中小企業が多いから、国内をなだらかにしてニクソンの要請に応えるものができたんで、明けてすぐサンクレメンテ会談で手打ち式みたいな形になるんですね。

田中 沖縄との関連でいうと繊維のほうはずっと重要だったてことですか。田中通産大臣にして、繊維問題をとにかく早く決着させて。繊維の件でも、牛場大使の回想録なんかでは、アレクシス・ジョンソン大使などからは繊維をうまくしないと沖縄のほうもうまくいかないといわれたと書いてありますけども、沖縄返還協定のアメリカの国内通過ってことからすると、そのための措置としてみると繊維のほうが重要だったというふうに考えていいんでしょうか。

楠田 まあ大きくのしかかっていたことは事実です。あれが批准したのは何月なってますか。私ははっきり記憶にないんですけど、ただ日本より早いんですね。

田中 衆議院の承認ってのが11月24日。

楠田 返還協定を可決承認したのは12月22日ですね。ただ、関連法案は継続審議にな

るわけ。それで初めて返還日が決まるわけですね。3月15日にぎじんしょを交換してま  
すね。

田中 私のほうで日付をちゃんと調べてくるべきだったんですけども、国連での代表権の  
時というその時期というのは、楠田さんが関与されたかぎりでいうと、重要だと思われて  
たのは、どうせ負けるものであるのなら、福田さんがやるより自分がやったほうがいいと  
いう、そういう認識ですか。

楠田 そういう認識ですね。それからまあ、もしくは仁義を、台湾に対して最後の仁義を  
すると。これは必ず後世にね、いい結果を、日台関係にいい結果をもたらすだろうという、  
そりゃあ、まあはっきりしてた。

田中 安全保障の面なんですけども、佐藤内閣当時ですね、いろいろな防衛計画ってのを  
やっていますけども、全般的にみて、佐藤さんの頭の中にどういう脅威認識があったか。日  
本の安全にとって脅威になるものがあるとすれば、それは何だというふうにお考えになっ  
てたんでしょうか。

楠田 そりゃあやっぱり、ソ連・中共でしょうね。アジアの全体の安全というか、そのた  
めに沖縄に米軍が基地をもってると。しかし、その米軍の基地が有効に機能するためには  
沖縄を返してもらわなければ住民の協力はえられないと、必ずしも有効に機能しないでは  
ないかと。それで、核の問題については科学技術の進歩というのがあって、例えば、沖縄  
に置かれてる核がどうい核か知らないけども、そういうものはもう沖縄に置かなくても  
よいんではないかと、というのが最初からのあれで、沖縄の基地の機能を損なわないとい  
うことが、一つの説得のキー・ポイントだったんですよ。

田中 ソ連・中共といった場合、どっちがより脅威であるとお考えになってたんでしょう  
か。

楠田 どうなんでしょうね。脅威といっても、軍事的な脅威なのか、あるいは政治的な意  
味での脅威なのかというあれでいえば、やっぱり中国、中共だったんじゃないでしょう  
かね。

田中 60年代の佐藤政権の頃にですね、軍事的に日本が攻められてしまうという脅威認  
識がどのくらいあったんでしょうか。

楠田 あんまりなかったですね。

田中 70年代後半とか80年代になりますと、例えばソ連が北海道を占領するとかね、  
そういう話がちらちら出ますよね、こういうような脅威論は当時。

楠田 それは、ソ連が北海道って問題は福田内閣の時に日中平和条約というものが正式に  
締結されますね、その時に出た話で、佐藤内閣時代にはまだソ連が北海道へってな話は全

くなかった。仮想敵国論という論議は何回か、日本は仮想敵国をもってるのかもってないのかという論議は国会では、これは社会党の岡田春夫さんなんかから出ましたし。それは仮想敵国はないと、いうことをいわざるをえないわけですよ。

村田 三矢計画ってのが明るみに出ますよね、岡っ春さんだと思いますけど。あの時は佐藤総理は全然ご存じなかったわけですか、そういう計画が防衛庁の中で進んでたということは。国会で野党から質問されて、大変驚かれるということなんですか。

楠田 まあ、事務方の作文ですからね、政治的な問題じゃない。防衛庁の情報というのがダイレクトに総理官邸に伝わってくることはないわけです。国防会議とかなんとか開けば別だけでも。だいたい、安全保障問題は外務省の担当ですよ。

田中 佐藤内閣の中で安全保障について議論をするということになると、基本的には外務省の北米局安保課の人と相談するという形で、あまり防衛庁内局と直接、内局の人が直接官邸に来ていろいろ議論するというようなことは。

楠田 それはなかった。今でもないんじゃないですか、あるのか今は。

田中 ないでしょうね。

楠田 政策決定というのは、安全保障に関する政策決定というのは、防衛庁は必ずしも中心じゃないんですよ。

田中 沖縄返還が決まった69年の佐藤・ニクソン会談の共同声明で、いわゆる韓国・台湾条項ってのが入ります。これに関連して私どもが聞いた防衛庁の関係の話だと、かなりいろんな朝鮮半島有事の想定をしてですね、この場合は事前協議があったらどうするかということを考えたという話を伺ったことがあるんですけども、これは防衛庁で考えて外務省にもいったらしいんですけども、こういうような作業というのは総理のところへ、69年の韓国・台湾条項あたり前後でですね、総理のところへ、この場合どうするかという詰めた話は伝わってきていたんでしょうか。

楠田 伝わってきておりませんね。だいたい、その韓国・台湾条項ってのは必ずしも共同声明には入ってないわけですから。プレス・クラブの演説に入れると。僕は反対したんですよ。プレス・クラブの演説は僕が責任者だから、こんなものは帰ってから国会で報告する時にすればいいじゃないかと、あるいは朝鮮条項ちゃんと入れればいいじゃないかといったのに、まあああいう形になって、外務省は困っちゃって、その問題も10日間くらい持ち越した。次官や幹部が総理官邸に集まって、官房長官も入って、これをプレス・クラブに入れると、それが御前会議で決まったもんだから、もう僕はいやといえないから、じゃあ入れようと、それで外務省から帰ってきた文章をそのまま中に入れたんです。

田中 こういう条項を入れる時に当時の幹部の方々がお話になった時の議論ってのは、ど

ういう論議なんでしょうか。本当に朝鮮半島が日本ノ安全にとって大事だと、だからそれを是非条項に入れようというのか、それともアメリカからいわれて、日本としてはこんなこといいたくないのに、しょうがないけど、これいわないと沖縄返還の交渉自体うまくいかないし、どうしようもないから、いやだけれども入れると、あえてそういうふうに単純化してしまうとどうなんでしょうか。

楠田 そりゃあ、後者ですよ。もし朝鮮半島で事が起こった場合、米軍二個師団ですか、これをどうするかということが、東京での外務省と当時の大使を中心にして、情勢をめぐる下準備がずっとおこなわれたわけでしょう。アメリカ側としては朝鮮半島の問題が一番心配、それから極東の範囲という問題は前から国会であって、すでに台湾海峡有事の際には安全保障条約が適用されるという答弁をしていたわけですね。だから、我々は台湾海峡の問題はそんなに固執したわけじゃないけど、それは朝鮮半島に付随して一連のものとしてくっついてきた。台湾海峡でそんなに議論が沸騰したという記憶はないですね。ただまあ、朝鮮に駐留してる国連軍、すなわち米軍を、安保条約に基づいて支援できるかできないかという。

田中 その際に事前協議があったら、どういうふうな対応をするというようなことは、最高レベルでは

楠田 イエスなんです。建前はイエスもあればノーもあるということですから、それを崩すわけにはいかない。そういう感触がアメリカ側に伝わったからあれを条約に入れないで、記者クラブ演説ではっきりさせると。そのために国務次官は特別に記者ブリーフィングをして、今日の佐藤のスピーチ読んでくれと、予め記者団に発表してるわけですね。これは非常に重要なんだよということをアピールして、そういう言葉でいったかどうか知らないけども、共同声明と同じなんだと。

村田 沖縄のことなんでございますけれども、若泉敬さんですね、京都産業大学の先生で当時佐藤総理のブレーンのような役割を果たした。若泉さんが去年お書きになった回想録によると、ニクソン・佐藤の間で沖縄が日本へ返還後もですね、有事には核兵器の持ち込みをですね、ほとんど自動的に日本側が認めるというようなですね、秘密協定がニクソン・佐藤の間であって、若泉さんが外務省とはまったく独自に橋渡し役をなすって、キッシンジャーとやって、外務省を排除するような形で4人だけでそういう話を進めて、総理と大統領はその69年の首脳会談の時にそういう交換文書を交わしてるんだというようなことを書いておられて、外務省はそれは一私人の発言であるとういうような声明をその後発表されたと思いますけども、先生ご自身が関わっておられた範囲で、そういう様子といいますか、実際に見聞きされたとかですね、あるいはまったくそういうことはお聞きになら



なかったとか、そういうふうなことはいかがでしょうか。

楠田 若泉さんを特使として起用して、それでニクソンといろいろ何回か話し合いをもって、というのは事実です。それは私がみんなセットしたわけですから。でもそのことは若泉さんとの間で、そのことは若泉さんは生涯秘密にしてくれといわれたから、私は今までしゃべらなかつたし、書かなかつたわけです。だけど、どういう心境の変化か、若泉さんご自身がお書きになったからわかつたことで、その前にキッシンジャーの回想録ではヨシダという人物が特使として活躍したという話は出ておりますけどね。それは日本国内でも若泉敬であるということはみんな知ってたけども、これという事実は、まあ証拠はないわけですね。ただ申し上げられることは、最後に小さい部屋に入って紙の交換をしたと書いておられる、その紙がどうなったかという問題はアメリカ側は知りません。あるいは後生大事にとっておいてね、文書公開の期日がきたら公開されるかもしれない。日本側から出てくることはまずありません。佐藤さんはおそらくマッチで燃やしたか、おそらく佐藤家にも伝わってないし、総理官邸にはもちろん残ってない。解釈として、私はね、これは佐藤・ニクソンの私的な交換文書であつてね、もしあつたとしても、日本政府を次の政権まで縛るものではないという解釈に立っている。

村田 佐藤総理から直接そのメモの話が聞かれたりしたことはございませんか。

楠田 ありません。佐藤さんもそういう話は一切しておりませんし、日記にも書いてないんじゃないかなと私は思う。

村田 他の側近にもそういう話はまったく洩らしておられないですか。

楠田 それはだって、私の知らないものを他の人が知ってる可能性はないですね。若泉さんと佐藤さんのお膳立てってか電話の取り次ぎもみんな私がやって、それは官房と外務すらも知らないわけですから。あれは僕もあの本みてへえあんなことあつたのかと、若泉さんからも聞いたことないし。あれはしかし、田中さんなんか政治学者としてどういうふうに感じられましたか。

田中 私はあの本を読んだかぎりでは、まだお書きになってないことはあるんでしょうけど、書いてることはかなりの程度本当なんじゃないかなあという感じがしましたけれども。特に彼があえてその辺のところで、あそこまで書いてですね、あえて嘘を書く必要はないんじゃないかと思うんです。ただ、部屋へ入って行ってというのは、どっちにしろ若泉さんも見てるわけじゃないし。佐藤さんもニクソンさんもお亡くなりになってるから、アメリカのキッシンジャーと、ただキッシンジャーもその部屋には入ってないんでしょう。村田 キッシンジャーは入って行って、そのメモをもっていったってということになってますね。

田中 あとは楠田さんがおっしゃったように、アメリカのほうで、アメリカのほうは多分ファイル残っていると私思うんですけども。ですからあと10年もすれば出るか出ないかはっきりすると思うんですけど。

楠田 この前ご覧になったかどうか知りませんが、NHKの1時間半ぐらいのスペシャル番組で、まあ私が出たのは3回ぐらいですけども、その取材班の連中はそのことを中心にして追っかけているわけです。それを見たところ、称する人が向こうの統合参謀本部議長かなんか当時の、キッシンジャーはそんなこと応える必要はないと、そんなこと日本の学者に聞いてくれと。

田中 またちょっと漠然とした質問になってしまって恐縮なんですけど、非核三原則ってのは佐藤内閣からですよ。その時の「持ち込ませず」についてですね、とりわけライシヤワー発言以来いろんな意見が80年代に出てきますけども、当初の非核三原則を始めた頃には「持ち込ませず」というのはどういう意味だというのでお考えになられたんですか。

楠田 非核三原則という言葉が出たのは、佐藤さんの口から出たのは小笠原返還協定の時に、社会党の成田知己さんの質問に対して小笠原は本島並と、核を持ち込まないし、持ち込みも認めないという、本土と同じなんですよという言葉が初めて出るわけですね。それが非核三原則という言葉で一人歩きしまして、次の年の国会施政方針演説で、今我々は核時代に生きていますという文章を私が書いたんです。その時、ちょっと若泉さんに教えるを乞うて、核時代というのはどういうのかをちょっとご相談したことがあるんです。私らの原案・原文はですね、作らず、持たずだったんです。持ち込ませずとまでは私は書かなかった。そしたら、その時核の問題が非常にあれなんでというんで、福田さんが幹事長で福田君にも原案を見せてくれということだったんで、福田さんは総務会で諮ったんですね。日本の核政策ってのはこういう形で条文にしたいといったら、池田まさのすけとうい死んだ、日通事件で連座した人がいましたね。その人が、なんで二つなんだ、持ち込ませずもちゃんと書けばいいじゃないかという議論が出て、その会はそうだそうだということになって、もう一回閣議をやり直したら、中曾根さんはじめ二三の閣僚がですね、そりゃそうだ、この際持ち込ませずも入れるべきだという話になって、それで後でまた付けられたんです。

田中 その時、持ち込ませるのを許さないというのは、どういう意味だというふうに、皆さんお考えに。

楠田 作らず、持たずってのは、まあわかりますわね。自分も持ってないけど、国内にアメリカ軍が核を持ってくることも許さないんだというようなことでね、艦船の搭載する核の問題にはみんな、思い及んでいないわけです。要するにアメリカが日本国内にね、我々

は持たないけども、アメリカが持ってくることも許さないというのが主眼。

田中 そうするとあれですよ、中曾根さんなんかもこれに、そのほうがよろしいといったってことから考えると、当時それじゃあアメリカの空母が核爆弾をたまたま積んでるのが日本に来たら、じゃあこれも追い返せってことまで詰めたとしたら、この先生方も後の言動からしてそこまでおっしゃらなかったんじゃないかという気もするんですけど。

楠田 そりゃあ後で問題になって、ラロック証言なんてのがあって。日本に寄港する空母の中には核兵器搭載してるものがあるというような証言。それじゃ三原則じゃないじゃないか、二・五原則じゃないかという話になる。だから、その三原則っていう言葉自体がね一人歩きしだしたわけですね、語呂がいいでしょう。それで社会党からこれは非常にいいことだから国会決議をしたいという申し出があった。これはいかんと、これは佐藤内閣の政策なんであって、あとの外交を縛るものじゃない。やっぱりその都度ある程度フリーハンドを持たなきゃいかんだろうというのが私の考えで、佐藤さんもそういう考えだった。じゃあどうするかというんで、また若泉さんに相談したら、こりゃ明々白々若泉さんの名前出していいわけですけども、非核、安保条約、平和利用そして核軍縮と、この四つを。最初からこれを施政方針演説に書けばよかったんだけども、社会党が国会決議にしろというまではそこまでは書く必要なかったわけです。非核に対する佐藤内閣の政策だけを書いた。それではもう国会決議をしろというのに対して拒否できないような感じになってきたんで、実は非核三原則は安保やなんかとみんな一緒なんだよという、若泉さんの考えで、それをこかい答弁した。その時は国会決議の問題はお流れになっちゃった。

田中 また若泉先生の話に戻るんですけど、お話をかがってますと、佐藤政権の政策決定の中で、安全保障がらみのことはかなり若泉先生のご意見が影響されてると。

楠田 核については。

田中 外務省とかのインプットはどのぐらいだと考えればよろしいんでしょうか。

楠田 その時は外務省とはまったく相談しない。

田中 すると、外務省にしてみると、なぜこういうふうになってくのかまったくわからない。

楠田 あっというわけですね。そりゃあまあ、普通は外務省が書いてきた原稿をそのまま読むというのがだいたい国会答弁の骨子なんですけど、私の時は材料はもらうけども、それを要約して佐藤さんが読みやすいように徹夜で集約してね、本会議答弁に読んでもらう。そうしないと、朝ですね、こんなに来るんですよ。そんな朝飯を食いながら読めるわけないでしょう。だから前の番に全部それを整理をして、相手の質問者に応じて得点をあげなきゃいけない。社会党だったらこう、民社党だったらこう、あんたのいうことは非常

にいい意見だというようなことを入れながら、政策論をしていかないと。1から10まで突っばねているわけにはいかないのが国会ですよね。ある程度お互いの点数稼ぎあいというようなところが。そういう準備をし、整理をして、必要なところは外務省から官邸に来てもらって、ロジックはこれでよろしいかと、それでよろしければ、あとは佐藤さんの言葉を私の表現でいいわけで。それは非常に多としてくれたわけですね。読んでメモしてね、なかなかできないんですけどね。

田中 佐藤総理の演説はすべて楠田さんがお書きになったんですか。

楠田 21回ね、国会演説やりましたけども、それ全部私が書いた。一語一句私が書いてわけじゃないですよ。要するに、私が責任をとって、各省から上がってくるのを。しかし、ま歴史観とか世界観とか、政治理念とかいうのは当然入れながら、今年度の政策はこういうのですといて、各省の政策を入れていかなきゃならない。予算獲得には影響するわけですからね。